

語中/k//t/音の有声化

大山 雄輔

1 調査の目的

東北方言全体に通底する顕著な音声的現象として、母音間における/k//t/音の有声化が認められるが、その有声化は/k//t/音の前後の音環境によっては阻止される傾向がある。この傾向については大橋(2002)などにより詳細な分析が試みられており、/k//t/音の有声化が生じるかどうかを判別する指標となる音環境は図1のように整理することができる。

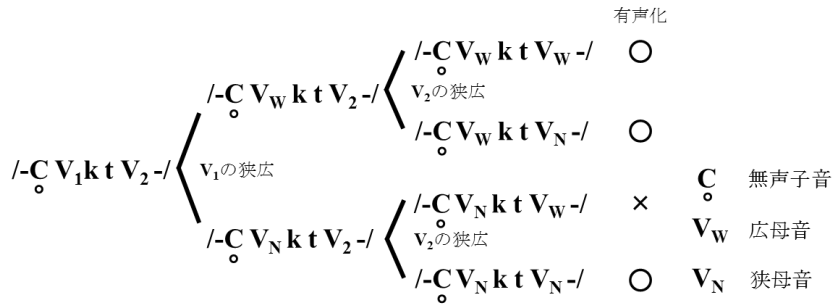


図1 東北方言における有声化阻止の条件

具体的には無声子音+狭母音(i,u)+/k//t/+広母音(a,e,o) : C_◦+V_N+/k//t/+V_Wという構造を有するとき、狭母音V_Nの無声化が生じながら/k//t/音の有声化が阻止される。つまり子音と母音の無声性が同化を起こすことがこの現象を生じさせている。その他の前後構造の場合には原則として有声化する傾向があるが、有声音節が隣接しているかといった他の要因も/k//t/音の有声化に関与しており、東北方言の音声現象として全域的に観察される現象でありながらその実情は複雑である。本調査は気仙沼市方言における/k//t/音の有声化の基本的傾向を観察・検討し、従来指摘されてきた有声化現象と照らし合わせながらその実態を把握することを目的として行った。

2 調査項目と調査票の作成

2.1 調査項目

$/k/t/$ 音の有声化の基本的傾向を観察・検討するために $/k/t/$ 音が様々な音環境に置かれた単語を選択して短文に埋め込み読み上げをお願いした。短文に埋め込んだのは、単語単独で読み上げをお願いしたときに比べて、より実際に発話を行うときに近い発音が観測できるのではないかと予想してのことである。 $/k/t/$ 音の周囲の音環境は、まず以下のように設定した。

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1) $/(C)V_w k tV_w -/$ | 3) $/-C V_N k tV_N -/$ |
| 2) $/(C)V_w k tV_N -/$ | 4) $/-C V_N k tV_w -/$ |

1)から 3)までは、 $/k/t/$ 音の前後が 1)どちらも広母音、2)広母音と狭母音、3)どちらも狭母音 という音環境であり、それに前接する子音 **C** がどのようなものであっても、原則として $/k/t/$ 音の有声化が生じることが期待される。本調査では 1)から 2)の各項目について、

- i) 子音 **C** がない
- ii) 子音 **C** が有声子音
- iii) 子音 **C** が無声子音

という場合分けを行い、その音環境に対応するような単語を含む短文を用意した。4)は無声子音+狭母音(i,u)+ $/k/t/$ +広母音(a,e,o) : $C_0+V_N+/k/t/+V_w$ という音環境であり、1節で述べた通り $/k/t/$ 音の有声化が期待できないものである。まとめると、1)から 3)は $/k/t/$ 音の有声化が生じ、4)は生じないという結果が予想される。

2.2 調査方法・話者の概要

調査の際には話者に短文が印刷された原稿を渡し、各短文につき 2 回ずつの読み上げをお願いした。聞き取りが困難だった際には再度の読み上げをお願いし、適宜質問を行うという形式を取った。話者の概要は以下のとおりである。

- 話者A 男性 70歳 気仙沼市出身
- 話者B 男性 63歳 気仙沼市出身
- 話者C 男性 74歳 気仙沼市出身

3 調査結果

音環境	単語	期待される有声化	A	B	C	
/-(C) V _W k t V _W -/	垢	aka	○	×	○	×
	中	naka	○	○	○	×
	鷹	taka	○	○	○	△注1
	頭	atama	○	△	○	△
	股	mata	○	△	-	-
	肩	kata	○	×	○	○
	猫	neko	○	×	○	○
	てこ	teko	○	×	○	○
	干支	eto	○	×	○	△
	下駄	geta	○	×	○	○
	桁	keta	○	△	○	△
	桶	oke	○	×	○	○
	模型	mokei	○	×	×	×
	苔	koke	○	×	○	△
	大人	otona	○	×	△	△
	ふもと	humoto	○	△	△	○
	外	soto	○	×	○	○
/-(C) V _W k t V _N -/	秋	aki	○	○	○	△注2
	薪	maki	○	○	○	○
	蠣	kaki	○	×	○	△注2
	暑い	atui	○	○	○	○
	夏	natu	○	×	○	○
	お札	osatu	○	×	○	×
	駅	eki	○	△	○	△注2
	招き猫	manekineko	○	×	○	○
	咳	seki	○	×	○	○
	越後	etigo	○	△	×	×
	熱	netu	○	×	○	○
	季節	kisetu	○	×	○	○
	奥	oku	○	○	○	○
	毒	doku	○	○	○	○
	解く	toku	○	×	○	×
	お釣り	oturi	○	×	○	×
	餅	moti	○	×	○	○
とちのみ	totinomi	○	×	○	×	
/-(C) V _N k t V _N -/	結婚式	kekconsiki	○	○	○	○
	机	tukue	○	×	○	○
	菊	kiku	○	×	○	×
	低い	hikui	○	△	○	○
	袋	hukuro	○	×	○	×
	七五三	sitigosan	○	×	×	×
	筒	tutu	○	×	○	×
	靴	kutu	○	×	○	×
普通	hutu:	○	×	×	×	

音環境	単語		期待される有声化	A	B	C
/-(C)V _N k tV _N -/	不気味	bukimi	○	/	○	△注2
	ゴミ袋	gomibukuro	○	/	○	○
	歯茎	haguki	○	/	○	△注2
	又聞き	matagiki	○	/	○	-
	力づく	tikarazuku	○	/	○	○
	三日月	mikazuki	○	/	△	○
	大仏	daibutu	○	/	○	×
	長靴	nagagutu	○	/	○	○
	愚痴	guti	○	/	○	×
	米びつ	komebitu	○	/	○	-
	実物大	zitubutudai	○	/	△	×
/-(C)V _N k tV _W -/	機関車	kikansha	×	×	×	×
	危険	kiken	×	×	×	×
	深い	hukai	×	×	×	×
	不幸	hukou	×	×	×	×
	フケ	huke	×	×	×	×
	彦星	hikobosi	×	×	×	×
	北	kita	×	×	×	×
	汽笛	kiteki	×	×	×	×
	ツタ	tuta	×	×	×	×
	太い	hutoi	×	×	×	×
	捨てる	suteru	×	×	×	×
人	hito	×	×	×	×	

表1 調査結果

- 有声化が確認されたもの
- ×
- △ 有声・無声音のユレが認められたもの
- 普段用いない、あるいは該当語の方言形の音声が異なっていたもの

3.1 /-(C)V_wk tV_w-/ (有声化が期待される)

一般に広母音は無声化が期待できないため、/-(C)V_wk t-/のV_wの無声化と連動している/k/t/音の無声化も生じないと考えられる。そのため、/-(C)V_wk tV_w-/タイプ音環境では/k/t/音が有声化することが想定される。調査の結果、話者Aの有声化が散発的であるのに対し、話者B、Cは多くの語で有声化が認められた。話者Aは「このような(対面調査のような)状況設定では方言は出にくい」との旨を話しており、本調査全体を俯瞰しても有声化の頻度は低い。共通語的発音に傾斜している可能性も考えられる。全体を見ると話者Bが有声・無声のユレはあるものの有声化の頻度が最も高く、「模型」を除いたすべての語が有声化を起こしうるという結果となった。話者B、Cの結果は従来より指摘されている規則を反映していると考えてよいと思われる。

3.2 /-(C)V_wk tV_N-/ (有声化が期待される)

この音環境は 3.1 に類似している。/-(C)V_wk tV_N-/の V_w に無声化が期待できないため、それと連動した /k/t/ 音の無声化も生じないと考えられる。調査の結果、有声化の状況は 3.1 に類似していた。話者 A の有声化は散発的であり、対する話者 B は「越後」を除く全ての語が有声化していた。これまでに指摘されている規則から期待される有声化が観察された。話者 C も有声化の頻度は高いと言えるが、一部の語で有声・無声のユレに加え口蓋化のユレが生じている点が特徴的である。これについては注を参照されたい。

3.3 /-CV_Nk tV_N-/ (有声化が期待される)

「結婚式」から「普通」までが /-C_oV_Nk tV_N-/:すなわち問題とする音環境に無声子音が前接している語、「不気味」から「実物大」までが /-CV_Nk tV_N-/:すなわち問題とする音環境に有声子音が前接している語である。話者 A は調査時間配分の不備により調査が行えなかったため、話者 B と C の結果を比較する。

話者 B は「七五三」と「普通」を除く全ての語に有声化の傾向が見られる。従来指摘されている規則によれば当該の音環境は有声化が期待でき、話者 B の発音はそれを強く反映していると言える。一方の話者 C は /-C_oV_Nk tV_N-/構造の場合に有声化の頻度が低下しており、特に「菊」と「筒」の 2 語については調査員が確認のために発した有声化させた発音に違和感を示した。全体を俯瞰すると、3.1、3.2 で取り上げた音環境に比べて有声化が生じにくく、特に /-C_oV_Nk tV_N-/構造の場合にその度合いが強い可能性がある。これについては 3.5 で考察を加える。

3.4 /-CV_Nk tV_w-/ (有声化が期待されない)

調査の結果、A、B、C の全話者が有声化を起こさなかった。3.1 から 3.3 までの調査結果と比較すると、その回答の一致は徹底したものである。これまでに指摘された「無声子音+狭母音(i,u)+/k/t/+広母音(a,e,o) : C_o1+V_N+/k/t/+V_w という構造を有するときに、狭母音 V_N の無声化が生じながら /k/t/ 音の有声化が阻止される」という規則は現在でも強固に保たれていた。

3.5 /-CV_{w/N}k tV_{w/N}-/タイプの音環境における /k/t/ 音の有声化の比較

最後に、全調査項目のうち /-C_oV_{w/N}k tV_{w/N}-/すなわち「無声子音+任意の母音(a,e,i,o,u)+/k/t/+任意の母音(a,e,i,o,u)」という音環境を持つものを取り出し、どういった音環境の場合に優先して有声化が生じるのか考察したい。なお、ここで /k/t/ 音に前接する子音を無声子音に限定したのは、有声化が期待できない /-CV_Nk tV_w-/タイプの音環境とまとめて統一させ比較するためである。

音環境	単語	期待される有声化	A	B	C
/ -C _o V _w k t V _w - /	鷹	taka	○	○	△注1
	肩	kata	○	×	○
	てこ	teko	○	×	○
	桁	keta	○	△	△
	苔	koke	○	×	△
	外	soto	○	×	○
/ -C _o V _w k t V _N - /	蠣	kaki	○	×	△注2
	お札	osatu	○	×	×
	咳	seki	○	×	○
	季節	kisetu	○	×	○
	解く	toku	○	×	×
	とちのみ	totinomi	○	×	×
/ -C _o V _N k t V _N - /	結婚式	kekconsiki	○	○	○
	机	tukue	○	×	○
	菊	kiku	○	×	×
	低い	hikui	○	△	○
	袋	hukuro	○	×	×
	七五三	sitigosan	○	×	×
	筒	tutu	○	×	×
	靴	kutu	○	×	×
/ -C _o V _N k t V _w - /	普通	hutu:	○	×	×
	機関車	kikansha	×	×	×
	危険	kiken	×	×	×
	深い	hukai	×	×	×
	不幸	hukou	×	×	×
	フケ	huke	×	×	×
	彦星	hikobosi	×	×	×
	北	kita	×	×	×
	汽笛	kiteki	×	×	×
	ツタ	tuta	×	×	×
	太い	hutoi	×	×	×
	捨てる	suteru	×	×	×
人	hito	×	×	×	

表2 / -C_oV_{w/N}k tV_{w/N} - /タイプの音環境における/k/t/音の有声化

表2は全調査項目から/-C_oV_{w/N}k tV_{w/N}-/タイプの音環境を持つ語を抜き出したものである。全体を通して前述のとおり話者Aは有声化が期待できない場合はもちろんのこと、有声化が期待される音環境下でも有声化が生じにくいことが分かる。一方の話者Bは、有声化が期待される場合は高い

同(1992)ではそれまでの方言調査の結果をもとに、図 3 の中で山形県大島方言を段階 a、岩手方言を段階 b、東京方言を段階 c に位置づけている。1 節の図 1 に示した東北方言における有声化阻止の条件はこの中で段階 b に位置する。本調査の結果で図 3 で音構造①に相当する $[-\overset{\circ}{C}V_N k tV_W -]$ という構造下で徹底して $/k/t/$ 音が有声化しなかったこと、図 3 の中で音環境②に属する $[-\overset{\circ}{C}V_N k tV_N -]$ という構造下で有声化した割合が低下していたことを合わせると、気仙沼市方言における $/k/t/$ 音の有声化の状況は段階 b と段階 c の中間に位置すると考えられる。つまり同(1992)に挙げられた代表地点に読み替えるならば岩手方言と東京方言の中間状態にあると言える。これが共通語化により東京方言的な段階 c に移行する過渡的様相をとらえたものかは判断しがたいが、東北方言に通底すると考えられていた $/k/t/$ 音の有声化とはやや異なった側面が存在していたことを述べておく。

4 まとめ

本調査では、3人の高齢層話者を対象に気仙沼市方言における母音間の $/k/t/$ 音の有声化現象を扱った。その結果、これまでに指摘された「無声子音+狭母音(i,u)+ $/k/t/$ +広母音(a,e,o) : $\overset{\circ}{C}_1+V_N +/k/t/+V_W$ という構造を有するときに、狭母音 V_N の無声化が生じながら $/k/t/$ 音の有声化が阻止される」という規則が保たれていることが確認できた。「有声化が阻止される環境にない音環境では有声化する」という傾向も確認できたが、その発音の実態は散発的であり、有声・無声のユレが観察されたことに加え、話者ごとのばらつきも表れている。本調査の結果からは、気仙沼市方言における $/k/t/$ 音の有声化現象は

- 1) $/k/t/$ 音の有声化が阻止される音環境は先行研究の結果と合致し、東北他地域の方言と同様のものである
- 2) $/k/t/$ 音の有声化が阻止される音環境にない場合には有声化する傾向にあるが、有声化がどの程度生じるかは個人差が大きい
- 3) 有声化が期待される音環境の中では、 $/k/t/$ 音が狭母音に挟まれた $[-V_N k tV_N -]$ という配置の場合が最も有声化しにくい。その中でもとりわけ無声子音が前接した $[-\overset{\circ}{C} V_N k tV_N -]$ という配置の場合にこの傾向が顕著である可能性があり、これは東京方言などに見られる特徴への接近とも考えられる

と総括することができる。

注

1 話者 **C** に対し「鷹」の発音を依頼したところ、「鷹」と「たが」は異なっているという意見を聞くことができた。「鷹」と異なり「たが」の方は「タンガ」[taŋga] のように鼻音化し、発音し分けられているようである。

2 話者 **C** に対し「秋」の発音を依頼したところ、有声化を起こしていない [aki] 加えて口蓋化を起こした [atçi]、有声化に加え口蓋化した[ag^hi]が観察された。全体的に話者 **C** は/ki/の口蓋化が顕著であった。

参考文献

大橋純一(2002)『東北方言音声の研究』おうふう

斎藤孝滋(1992)「母音無声化の「広さ」と「強さ」－岩手方言を中心として－」『国語学研究』31